

続・金谷健一のここが変だよ日本人の英語

第3回

金谷健一
岡山大学

1. 音は区別できればよい

前回に続いて発音を取り上げる。発音で最も大切なのは「区別」である。例えば日本人の苦手な l と r のそれぞれの発音の仕方は英国と米国で多少違うし、地域や人によって異なる。このため「正しい l と r の音」というものは存在しない。しかし両者が混同されることはない。だから、必要なのは誰が聞いても区別できることである。

例えていえば、歌を歌うとき歌手と同じ(絶対)音程を出す必要はない。相対的な音程が同じなら「同じメロディー」である。男女や人によって出せる声が違うから、音程を同じにせよというのは不可能であり、それをするのは物まね芸人の仕事である。

しかし、学校の英語の授業で先生はネイティブのテープを聞かせ、生徒に「そのまま真似るように」と強要する。だから日本人は音をどう区別してよいかわからない。だから外国人に通じない。

2. 母音の区別の仕方

日本語の母音はアイウエオの5個しかないが、英語ではそれぞれに口の開け方が「広い」音と「狭い」音の2種類(アは例外で3種類)と、それらを組合せた二重母音がある(注1)。

アの音

「広いア」は口の中を広げ、あくびをする感じで発音する。art の音がそうであり、辞書には [ɑ:] という発音記号が書いてある。この [ɑ:] を日本人は「伸ばす記号」と誤解している(注2)、急いで話せば短く、ゆっくり話せば長くなり、伸ばすか伸ばさないかで区別されることはない。各母音はそれぞれ「響き」で区別される。

「狭いア」は口をあまり空けないで発音する。but の音がそうであり、辞書には [ʌ] または [ə] と書いてある(注3)。日本人が無意識にアという音と普通はこの音になる。

アにはもう一つ「平らなア」がある。これは口の中を極端に狭く、かつ横に広げて発音する。hat の音がそうである。辞書には [æ] という発音記号が書いてあり、日本語のアとエの中間に聞こえる。日本人には苦手な音であり、「狭いア」で代用しがちなので、hat のつもりが hut になる。口の中を十分狭く平らにしなければならない。

イの音

「広いイ」は唇をそのままにして口の中を広げる気持ちで発音する。hit の音がそうである。辞書には [i] という発音記号が書いてあり、日本語のイとエの中間に聞こえる。

「狭いイ」は口の中を狭め、唇を横に引いて発音する。heat の音がそうであり、辞書には [i:] という発音記号が書いてある。これも日本人は「イを伸ばす」と誤解しているが、長短は関係なく(注4)、hit と heat ではイの響きが違う。日本人は長さで区別しようとするので、区別になっていない。

ウの音

「広いウ」は唇をそのままにして口の中を広げる気持ちで発音する。pull の音がそうである。辞書には [u] という発音記号が書いてあり、日本語のウとオの中間に聞こえる。

「狭いウ」は口の中を狭め、唇をすぼめて前に突き出して発音する。pool の音がそうであり、辞書には [u:] という発音記号が書いてある。これも「ウを伸ばした音」ではなく、pull と pool ではウ

の響きの違いで区別される。

エの音

「広いエ」は唇をそのままにして口の中を広げる気持ちで発音する。fairy の音がそうである。辞書には [ɛ] または [ɛə] という発音記号が書いてある。

「狭いエ」は口の中を狭め、舌をやや持ち上げ、唇を横に引いて発音する。ferry の音がそうであり、辞書には [e] という発音記号が書いてある。

日本人は fairy と ferry はエの後に弱いアがあるかないかで区別する(確かに [ɛ] の後には弱い [ə] が続く傾向にある)が、実際にはエの響きの違いで区別される。ただし、この区別が問題になる場面はまれで、日本人は特に区別する必要はない(このため発音記号を区別しない辞書もある)。

オの音

「広いオ」は口の中を広げる気持ちで発音する。not の音がそうであり、辞書には [ɑ|ɔ] という発音記号が書いてある。前者が米音、後者が英音である。響きがかなり違うが、どちらにしても日本語のオとアの中間に聞こえる ([ʌ] とは違う意味で)。日本人にとって [ɑ] と [ɔ] を区別する必要はなく、それ以外の母音(特に「狭いオ」と区別することが重要である。

「狭いオ」は口の中を狭め、唇を丸めて発音する。note の音がそうである。辞書には [ou] という発音記号が書いてあるが、日本人は「オの後にウが来る音」と誤解している。確かにウの響きで終るが、このウは非常に弱く、聞こえないことが多い。そうではなくて冒頭のオの響きの違いで [ɔ] と [o] が区別される。

実際の場面で重要なのは [ɔ:] と [ou] の区別である^{注5)}。bought ↔ boat, caught ↔ coat, naught ↔ note, Paul ↔ pole などすべてオの響きの違いで区別されるのに、日本人は後にウがあるかないかで区別しようとしてオの音が同じになり、ネイティブが聞いて区別できない(仕方がないから文脈で判断する)。国際会議ではほとんどの日本人

が because [bkɔ:z] を [bikouz] と発音している。

二重母音

二重母音には [ai], [au], [iə], [uə], [ei], [ɛə], [oi], [ou] の8個あるが^{注6)}、どれも1音節であり、音が連続的に変化して別の響きで終わる。そして先に述べたように、最初の音のみが本質的である。そのため、これらをそれぞれ単母音 [a], [a], [i], [u], [e], [ɛ], [ɔ], [o] に置き換えても意思の疎通にまず問題がない。しかし、二つの記号が並んでいるので、多くの日本人にはこれらを二つの母音を別々に発音するものと誤解している。

特に二重母音で始まる語は日本語のアクセント規則により、2音節に分解して最初の音を低く、次の音を高くする癖がある。例えば highschool [háisku:l] は ハ|イ|スクール となりがちである。high [hai] は1音節であり、高く強いアの音が連続的に低い弱い音に変化し、イの響きが残る(なくてもよい)。日本人は high 単独では正しく発音できるのに、後に school がつくと high の抑揚を変えてしまう。

母音のまとめ

冒頭に述べたように、異なる音をどこで区別するかがポイントである。単母音はアイウエオの各々に広い音と狭い音がある。アに平らな音があるが、エは広い音と狭い音を区別する必要がないから、合計10個の母音があり、それぞれ響きが違う。8個の二重母音は最初の音が本質である。

しかし、多くの日本人は伸ばしたり、次に別の音をつけたり、どうでもよいところを変えて区別したつもりになるので、ネイティブが聞いて区別できない。それぞれの音の響きの違いを区別することが英語の発音の最初のステップである。

3. 子音の区別の仕方

l と r の区別

私が日本人の英語発表を聞いた限りでは、l のほうが問題が多いようである。グラフの説明などの line (線) がよく Rhine (ライン川) に聞こえる。

lは唇をそのままにして口の中を狭くし、口をやや横に広げる感じで舌を上歯の裏につけて、やや力を込めて明るいルの音を出す^{注7)}。

一方、rは口をやや丸め、口の中を広げ、舌をそらせ(あるいは丸め)、ウに近い暗いルの音を出す。日本人がlを意識せず、いい加減にルというと(人にもよるが)rに近い音が出やすい。

thの発音

多くの日本人のthがsまたはzに聞こえるのは音が“出すぎる”からである。例えばthemeとseemの違いは、seemがくいしばった歯の間からズーと息が漏れるのに対して、themeは歯の間に舌を入れてその息の漏れを止め、それでもかすかに息が漏れる、それがthの音である。したがって非常に弱い音であり、努めて舌で音を“押し殺す”必要がある。

どうしてもできない人は(積極的には勧められないが)弱いfの発音で代用してもよい。sで代用するよりよっぽどthに聞こえる。this, themなどの有声音の場合も同じであり、できる限り舌で息を止めて音を“押し殺す”感覚である。

sとshの区別

例えばsee [si:]とshe [ʃi:]の区別ができない日本人が意外に多い。しかしsoup [su:p]のsやshoot [ʃ:t]のshは正しく発音できる。これはカタカナでス、シュと表記が異なることからわかるように、日本語としても異なる音だからである。問題はiが続く場合であり、日本語表記は共にシである。しかし区別はそれほど難しくない。スとシュの後半のウをイに変えればよい。そしてsは口を横に引き、shは唇を丸めて発音すればよい。

fとvの発音

これも一部の日本人は苦手のようなのである。上歯で下唇を噛むという説明もあるが、実際には上歯を下唇の裏に軽く当てる感じであり、その隙間から息だけ出してかすれた振動音を出すのがfであり、声を加えたものがvである。

vの音はbの音と似ているが、bの音は閉じた唇を離れた瞬間に出るのに対して、vは歯と唇の間を通る息によって持続的に出る振動音である。このためbは「破裂音」、vは「摩擦音」とも呼ばれる。だからbとvは音が瞬間的か持続的かで区別する。

zとその類似音

日本人には同じに聞こえ、実際の場面でもそれほど問題にはならないが、英語としては異なる音がいくつかある。size [saiz]〈寸法〉とsides [saidz]〈sideの複数〉はカタカナでは共にサイズであるが、sizeの[z]は「摩擦音」であり、歯の間からズーという音が継続的に出るのに対して、sidesの[dz]は「破裂音」であり、上歯の裏側に付けた舌を離れた一瞬に出るズツという音である。これも音が持続的か瞬間的かで区別する。

同じ関係がvision [viʒən]とJohn [dʒən]のジョにもいえる。ʒは舌先をどこにも付けずにジューという音を継続的に出す摩擦音であるのに対して、dʒは舌を丸めて上口蓋に押し付けていたのを離れた瞬間に出るジュツという破裂音である。

hの発音

ハ、フ、ホのhの音は日本人には問題ないが、ヒ、例えばhe [hi:]のhの音は注意が必要である。日本人は意識していないが、日本語のヒのhはハ、フ、ホのhと異なっている。ハ、フ、ホのhはただ息が出るだけであるが、ヒのhは息が口の中で振動して出る摩擦音である。これはドイツ語のIchのイツヒのヒであり、英語の子音hではない。

だからhe, hill, heatなどを発音するときは意識して、息を弱めて澄み切った音を出すよう心がけるとよい。もちろん日本語式に発音しても意味が取り違えられることはないが(むしろ[i]と[i:]の区別が重要)、ネイティブが聞くと、汚い雑音に聞こえる。

yの発音

日本語のヤヅユヅヨのヅ、エはイ、エと同一視

されるが、英語としてははっきり異なる音である。例えば year [jɪə] 〈年〉はユを発音するように口の中を狭めてから発音するが、ear [ɪə] 〈耳〉は口の中が広いままなので響きが違う (Happy New Ear! と挨拶しないように注8))。

子音の連続

tr, str のように子音が連続すると日本人はトル、ストルのように各子音を別々に発音しがちだが、これらはツ、スチュのように一気に発音しなければならない。だから tree のカタカナ表記の「ツリー」は原音に近い。しかし、例えば street は1音節なのに日本人が「ストリート」と言うと2~4音節になる。

特に注意が必要なのは constraint, construct, instruct のように前に n が来て nstr となる場合である。多くに日本人は consto-raint, consto-ruct, insto-ruct となって非常におかしい。con や in の前で一息ついて con-straint, con-struct, in-struct と発音するのがよい。

語末の子音

語末の s や t が発音できない日本人がかなりいる。例えば犬の複数 dogs [dɒgz] で、本人もそう言っているつもりなのに dog としか聞こえない。人に聞いてもらって確認するとよい。

t の場合も同じで、音が低いと聞こえなくなり、無理に言おうとすると、例えば point が pointo になってしまう。それなら言わないほうがましだ。しかし、複数の s は意味に関わるので聞こえるように言わないとまずい。

s が聞こえない原因は、高音から低音に下げながら [dɒg] を発音するので、[g] が非常に低音になり、それに子音 [z] をつけようとするからである。一方、fox [fɒks] のように無声子音で終わる場合は日本人でも [ks] がちゃんとと言える。これは [k] が息だけであり、声を伴わないため [k] が低音にならないからである。

dogs を正しく言うには、[ɔ] の音を高音から瞬

間的に下げ、直ちに反発させ、[g] を言うときは高音にする。そうすれば [z] を付けるのに問題は無い。この下げた音を瞬間的に元に戻す要領はネイティブの発音をよく聞けばマスターできる。この反発がないと音が低いままになり、高い音に戻すために次の音を上昇させると日本式英語となる。

(続く)

注1) 「広い」「狭い」はここで表現の便宜に用いているだけで、正式な音声学の用語ではない。フランス語やドイツ語など他の言語では母音にイとウの中間音など5種類以上あるが、英語はアイウエオの5種類であり、「広い音」と「狭い音」の区別さえできれば他の言語より習得しやすいといえる。

注2) [:] はその音を伸ばすことを表すのではなく、それと合わせて一つの音を表す。例えば [a] と [a:]、[i] と [i:]、[u] と [u:] はそれぞれ異なる母音である。[:] を用いるのは、それらが“多くの場合やや長めに発音される傾向があること”と、異なる母音ごとに別の記号を用いると(音声学者によってはそうしている)記号が煩雑になるからである。これが日本人の英語の学習に非常にマイナスになっている。

注3) [ʌ] と [ə] は強く言うか弱く言うかの違いで、意識して区別する必要はない。このため同じ記号を用いる音声学者もいる。

注4) 長短を左右する要素の一つは次に有声子音が来るか(または何も来ない)、無声子音が来るかである。同じ [i] でも hit よりも hid のほうが長めであり、同じ [i:] でも heat よりも heed のほうが長めである。したがって hid の [i] が heat の [i:] よりも長いこともある。[u] と [u:] でも同じである。

注5) [ɔ] と [ɔ:] は長さだけでなく響きも多少違う。しかし、それを区別する必要はなく、日本人はこの場合に限り、[ɔ:] は [ɔ] を単に伸ばせばよい。それよりも、これらを [o] や [ou] と区別することが肝心である。

注6) その他、r の音で終わる音(米音)や三重母音があるが、ここでは省略する。

注7) 厳密には l に「明るい l」と「暗い l」がある。後者は fill, pill, till など語末に来る l である。これは口の奥で発音するのでフィオ、ピオ、ティオのように聞こえる。米国の5セント銅貨 nickel [nikl] は日本語のネコと同じに聞こえる([i] は広いイ)。

注8) 年賀状に A Happy New Year! と A をつける人が多いが、これは誤りである。“正月の挨拶”は Happy New Year! である。ただし、year は普通名詞なので「文章中の名詞」としては冠詞 a が要る。だから年末に (I wish you) Merry Christmas and a Happy New Year. と書いたりする(Christmas は常に大文字で始める固有名詞だから a は要らない)。これが a が要るという迷信の種らしい。